

サンダカンと日本人

——かどのりまる やすたに き よ じ門教丸、安谷喜代次をめぐって——

望月 雅彦*

○はじめに

最近、大正期に書かれた 3 冊の本を読んだ。原勝郎『南海一見』(東亜堂書房、大正 3 年)、三穂五郎『邦人新発展地としての北ボルネオ』(東京堂書店、大正 7 年再版、以下『北ボルネオ』と略記)と田澤震五『南国見たまゝの記』(新高堂書店、大正 11 年再版)である。『南海一見』は 1979(昭和 54)年に中公文庫で再刊されているが、他の 2 冊は古書店めぐりをしても、なかなかお目にかかれない稀こう本である。

これらの本に共通している点は、著者が英領北ボルネオ(現、マレーシア・サバ州)のサンダカンの土を踏んでいるということ、そしてサンダカンとその周辺の在留日本人の動向について観察を試みている点である。これらの著作をもとに大正期のサンダカン周辺の在留日本人、中でも門教丸、安谷喜代次¹につき述べてみたい。この 2 名はサンダカン日本人墓地に墓碑があり、英領北ボルネオ関係の日本語史料にも散見される代表的な在留日本人である。しかし両者が姻戚関係にあったことはあまり知られていない。

○サンダカンの印象—アメリカの香り—

サンダカンは当時の日本人旅行者にどのような印象を与えたのだろう。『南海一見』は原勝郎²が 1913-14(大正 2-3)年に植民政策視察のため東南アジアを巡った時の見聞記である。彼はサンダカンの印象を次のように記している。

「いま一つサンダカンの特徴とも云ふべきことは、此処まで来ると、亜米利加の香ひがし始めることである。湾内には密貿易取締りの為巡邏する米国の小蒸汽船が碇泊して居り、市中には米国領事が駐在して居る。つまり比律賓群島が間近いからであつて、香港から来て比律賓の南部に渡らんとする者は、先ず此サンダカンを以て足溜まりとし、或いは体格検査を受け、或いは証明書を下付して貰ひ、然る後二週間一回新嘉坡から来る独逸船に乗り換へて、ホロー又はザムボアンガへ渡る。而して日本旅館が此処に三軒もあるのは此道筋を伝はつて行く日本人が可なりあることを示すものである。」(130-131p、ルビ省略)

三穂五郎(前出)も何故フィリピンに渡るのにサンダカンを経由するのか疑問だったようである。彼が調べて見ると香港からフィリピンに直接渡ると上陸が難しく、このサンダカンの米国領事の証明書があ

¹ 安谷喜代次の名前については、喜代治と書かれている文献もあるが、サンダカン日本人墓地の墓碑銘、外務省外交史料館蔵の外国旅券下付および身分関係史料はすべて喜代次となっている。

* ボルネオ史料研究室

² はら・かつろう。京都帝国大学文科大学教授、文学博士。

ると容易に上陸できたようで「米国領事は物の分つた寛大な人で、証明書もサツ々々と呉れる」と『北ボルネオ』に書いている。「米国領事の証明書」とは、おそらくトラホーム(眼病)などでは無いという疾病についての証明書であろう。サンダカンを足溜まりにしていた日本人は、ホロ島等での真珠貝採取を目的にフィリピンに渡る者が多かったようである。

○門教丸—サンダカン日本人会長—

三穂五郎の『北ボルネオ』によると「此処にはふじや ありきや藤屋と有喜屋と云ふ日本宿屋が二軒ある。幸い藤屋の主人門教丸君が出迎えに来て居つたので、直に其家に投じた、汚穢い宿屋であるが、日本流の風呂もあり又日本人の出入りが多いので、在留日本人の状態などを取調ぶるに便宜が多い。」(191p)とある。

サンダカンの日本旅館の一つ、藤屋(『南国見たまの記』では富士屋ホテルと書かれている。)を経営していたのが門教丸である。彼は 1876(明治 9)年 8 月 2 日生まれ。本籍地は長崎県南高来郡大正村甲 203(現在の長崎県南高来郡みなみたかぎくん瑞穂町伊福甲 203)。戸主で浄土真宗光明寺第 13 代目住職じみん慈愍の弟である。門家は戦国大名加藤清正の縁者が僧籍に入り建てたと伝えられている。田澤震五の『南国見たまの記』によると彼はサンダカンで旅館を経営する以前に、米国で 9 年滞在していたようである。又台湾総督府にボルネオ産の鉄道枕木を納入するため増田幸一郎と共同して門商會を設立していたと書かれている。門教丸は田澤がサンダカンを訪問した時、1921(大正 10)年には日本人会長となっていた。門教丸はタワオの病院に入院し、

そこで老衰のため死亡したようである。

サンダカン日本人墓地の墓碑銘によると「光遠院釈現教、俗名門教丸、享年 61 歳、昭和 14 年 6 月 22 日死亡、明治 41 年渡航、旅館業経営、大正 6 年以東本邦経農園代理店兼営、同 7 年 11 月日本人会理事就任、同 10 年 1 月会長就任。以来在民のため云々。日本人会建立」とある。

○安谷喜代次—安谷椰子園主—

安谷喜代次は 1882(明治 15)年 1 月 9 日に父儀三郎・母チヨの三男として生まれた。本籍地は長崎県長崎市酒屋町 38 である。安谷家はもともと質屋(屋号・ちとせや千歳屋)を生業としてきたが、彼は質屋を嫌っていたようである。長崎県庁から 1911(明治 44)年 9 月 1 日に旅券が下付され、彼はゴム栽培事業視察のためボルネオに渡った。1912(明治 45)年 2 月 29 日には旅券が返納されている。この間にサンダカン対岸タンジョン・アルの英国人所有椰子園を買収する話があり、当初はゴム栽培事業を企図していたが椰子栽培事業に転換したものである。安谷喜代次は同年 6 月に永住するため、質店をたたみ父母、妻サミを同伴して北ボルネオに渡航した。

妻サミが結核のためボルネオで病没し、その後 1913(大正 2)年 8 月 28 日に光明寺の娘門文代と婚姻届出をしている。門文代は 1893(明治 26)年 6 月 16 日生まれで門教丸の実妹である。安谷喜代次は婚姻した翌月には後妻文代を同伴して北ボルネオに渡航している。

田澤震五は『南国見たまの記』でタンジョン・アルの安谷家の様子を次のように記述している。

「(安谷喜代次)氏の家は例の南洋風に床が極めて高く、殆ど二階の様に出来た新造の建築で、屋根は南洋特種のニッパ葺き、部屋数も相当あって、誠に気持のよい家であった。」(47p)

安谷喜代次は先妻サミとの間に長男正、二男次郎、後妻文代との間に長女たか子、三男儀三郎(喜代次の父儀三郎と同名)、四男重三郎、五男靖、六男武司を設けた。二男次郎はボルネオで死亡。たか子はタワオ病院に看護婦として勤務。儀三郎は1944(昭和19)年10月現地徴集され、ラノウ教育隊で初年兵教育を受けた。その後、大塚部隊北田隊に配属され、敗戦後にアピ(現、コタ・キナバル)で死亡した。安谷喜代次はマラリアのためサンダカンで死亡したようである。サンダカン日本人墓地の墓碑銘によると「釈喜法信士、俗名安谷喜代次、享年61歳、昭和16年8月21日死亡」とある。

この安谷喜代次について『インタビュー記録・日本の英領マラヤ・シンガポール占領(1941-45)』(龍溪書舎、1998)の中の遠藤方三氏インタビュー記事では次のようにある。

「日本人で、個人的に明治時代後半から行って代々住んでおるのが、サンダカンの湾の対岸、バーハラ島に住んでコプラの農場を200エーカーもっておった。名前は安谷喜代治、奥さんがマレー人だね。この人は戦争の始まる2年前、1939年に亡くなっているんです。義三郎という子供が一人おりまして、(占領期の)後半、労務係として州庁で使ったことがあるんです。彼は敵が来てから徴兵されて、向うで戦死したということが分っています。」(449p)

この記事の安谷喜代次に関する部分は、遠藤方

三氏の記憶違いか(例えば「奥さんがマレー人」)誤りが多く、訂正または削除が必要であろうと考える。

○まとめ

大正期のサンダカン周辺には、前述したようにフィリピンに渡る者、門教丸・安谷喜代次のように永住覚悟で事業を営む者、それから木下クニに代表される娘子軍、他に一攫千金を夢見て渡航してきたが途中で無一文になり、日本旅館主の情けにすがり寄食していた者、水汲み人足になった者など様々な日本人が在留していた。

安谷重三郎(喜代次・四男)氏の話によると「門家」と「安谷家」は喜代次が門教丸実妹文代と結婚する以前から深い関係があったようである。安谷喜代次は、先にサンダカンに渡航していた門教丸に刺激されボルネオに渡ったと考えられる。おそらくタンジョン・アルの英国人所有椰子園を買収する話も門教丸から出たものであろう。安谷椰子園のあったタンジョン・アルは、サンダカン対岸の文字通り「タンジョン＝岬」であるが、地形的には脇に膝ぐらいまでの深さの川が流れていて一見小島の様であったという。安谷喜代次は家族と猿、犬、狸々(オランウータン)など動物を飼い、時にはワニ狩りなどをしながら椰子園を経営していた。この椰子園に台湾総督府の高官が多く訪れていたようで、台湾総督府が英領北ボルネオを日本人南進の適地と見て注視していたことがうかがえ興味深い。(終了)

※この小文を書くにあたり、安谷重三郎(前出)氏から貴重な戸籍史料や証言をいただいたことを明記し感謝いたします。